

小説『人間革命』の戦争観

—仏教的人間主義の視点—

宮 川 真 一

はじめに

2022年2月24日、ロシア軍は隣国ウクライナへの軍事侵攻を開始した。ウクライナ・ロシア両国では数多の人命が失われ、限りない悲劇が生まれている。核兵器使用の可能性が取り沙汰される緊迫した事態は、かつてのキューバ危機を思い起こさせる。ウクライナ侵攻から1年という歳月が経過した現在でも、この戦争には終息が見通せない。日本でもマスメディアは連日ウクライナ情勢を報道し、ウクライナ戦争に関する書物が続々と出版され、各種専門家がさまざまな声を上げ続けている。そのような中、作家・元外務省主任分析官でキリスト教神学・ロシア専門家でもある佐藤優は、国内でウクライナ危機をめぐる代表的な論客の一人である。佐藤はまた、SGI（創価学会インタナショナル）会長であり創価大学創立者でもある池田大作の思想と行動を高く評価し、池田思想をテーマとする書を多数刊行してきた。ウクライナ戦争を論じるにあたり、佐藤は池田の思想にたびたび論及している。

2022年6月、佐藤優は『プーチンの野望』と題する書を緊急出版した。この書で佐藤は、池田大作とウクライナ国立キエフ工科大学総長ミハイル・ズグロフスキーとの対談集『平和の朝へ^{あした} 教育の大光』を12ページにわたり引用している。「戦争が起きている状況でこそ、対話を進めるべきだ。しかもわれわれが敵と思っている人との対話こそを始めるべきだ」。世界はこの路線で進むべきであり、「闘う言論」を展開していかなければならない。「私たちは今こそ『池田・ズグロフスキー対談』に立ち返り、議論をスタートするべきだ。ウクライナ情勢を解決するために何よりも重要なことは、すでに対談集『平和の朝へ 教育の大光』の中に答えが書かれている」と佐藤は述べている（佐藤 2022a：250-66）。

2022年6月、佐藤優は「池田思想の源流『若き日の読書』を読む 第7回『隊長ブーリバ』とウクライナ紛争」と題する記事を発表した。佐藤は「プロテスタントのキリスト教徒だが、戦争を分析する際には、池田大作創価学会第三代会長が創価学会の『精神の正史』として書いた小説『人間革命』の有名な冒頭の格言を基本にして考えることにしている」という。『人間革命』はこう始まる。「戦争ほど、残酷

なものはない。戦争ほど、悲惨なものはない。だが、その戦争はまだ、つづいていた。愚かな指導者たちに、率いられた国民もまた、まことに哀れである」(①:15)¹⁾。戦争当事国はいつも自らの行為が正義であると主張する。「しかし、世界宗教の視点からは、指導者たちの心の歪みが、国民をあわれな状況に追い込んでいるのだ」。国家主義という宗教ではなく、「池田氏の戦争観を基準に据えて国際情勢を読み解くことが、現在、最も重要なこと」であると佐藤は述べている(佐藤 2022b:177-8)。

2022年6月、佐藤優は「希望の源泉 池田思想を読み解く 第71回『人間のための宗教』を高らかに宣言」を発表した。佐藤によれば、池田思想とその土台にある日蓮仏法を基準とすれば、ウクライナ侵攻について2つの大前提が導き出される。1つに、「何よりもまず民衆に目を向けるべきだということ」である。ウクライナ危機について考えるとき、人はどうしても国の指導者にばかり注目し、この地に暮らす民衆が視界に入らなくなってしまう。言うまでもなく、ロシア政府が行っていることは決して許されない。しかし、ウクライナの民衆だけでなくロシアの民衆もまた被害者である。ロシアにも平和を求める民衆が生活しており、その人たちとの連帯も求められている。2つに、「一人のトップを100パーセントの悪人として捉えることは避けるべきだ」ということである。佐藤は、「どんな人間にも生命の奥底には仏性があり、変わる可能性を秘めていると考えるのが日蓮仏法であるから」だと述べている(佐藤 2022c:54-5)。

2022年8月、佐藤優は「希望の源泉 池田思想を読み解く 第73回 創価学会の『日蓮本仏論』に見る民衆救済の視点」を発表した。ここで佐藤は著書『プーチンの野望』に触れ、「ウクライナ戦争を終わらせて平和を取り戻すためには、今こそ池田思想に学ばないといけない」との思いを語っている。佐藤によれば、池田思想に学ぶべき点の1つに、「断じて戦争を避けようとする、根源的な反戦・平和思想」と「核兵器を絶対悪とする思想」がある。2つに、「自分と相いれない相手に対しても対話の努力をあきらめないこと、そして、対話こそが平和の礎となるという強固な信念」を挙げている。一国の指導者を「悪魔」のように論じることは、対話の道を閉ざしてしまう。佐藤は、池田思想を共有する人々にもロシア側との対話をあきらめないよう促している(佐藤優 2022d:53-4)。

本稿の目的は、池田大作の著作である小説『人間革命』の戦争観を全体として明らかにすることである。池田の平和観については、すでに多くの研究が積み重ねられてきている。佐藤優による上記の論考を踏まえ、池田の戦争観を正面から取り上げた論文が書かれなければならない²⁾。以下ではまず、『人間革命』とその分析方法を説明し、同書における戦争への言及について量的に考察する。次いで、『人間革命』の戦争観から5つの要素を抽出し、それぞれ質的に考察していく。最後に本稿を要約し、結論を述べたい。

1. 小説『人間革命』と分析方法

小説『人間革命』とは、創価学会第二代会長戸田城聖の精神を後世に伝えるため、創価学会第三代会長池田大作が書き綴った大河小説である。「一人の人間における偉大な人間革命は、やがて一国の宿命の転換をも成し遂げ、さらに全人類の宿命の転換をも可能にする」ことが主題となっている(①:8)。戸田の弟子として文中に登場する「山本伸一」は、池田がモデルとなっている。物語では1945年7月3日から1960年5月3日に至る、日本戦後史における創価学会の歴史が、戸田の後半生と山本の師弟の闘争を軸に綴られている(創価学会 2023)。

小説『人間革命』は、戸田城聖と池田大作という師弟が生み出した書である。1951年の春、戸田は『聖教新聞』に掲載する同じ題名の小説を書き始めた。戸田の嬉しそうな声を耳にした池田は、「私もまた、いつの日か、続『人間革命』ともいふべきものを書かねばならない」と即座に思った。1957年夏、戸田と池田は軽井沢で『人間革命』について言葉を交わした。池田は戸田の声の響きから、戸田の精神を後世に伝えることは自分の使命であり、戸田の期待であることを知った(①:5-7)。1958年4月2日に戸田が逝去したあと、池田は「すぐに執筆の構想を練り上げていった」(⑫:494)。『人間革命』の執筆が発表されたのは、1964年4月のことである。戸田の七回忌法要の席上であった。そして、この年の12月2日、「凄惨な地上戦の舞台となり、戦争で、最も民衆が苦しめられた沖縄の地で、世界平和を願い、書き起こされた」(創価学会 2023)。1965年1月1日、法悟空のペンネームで『聖教新聞』紙上での連載が始まった。それから28年が経過した1993年2月11日、1509回の連載をもって『人間革命』は完結したのである(『聖教新聞』2023.2.11)。『人間革命』の単行本も、1965~93年にかけて全12巻が発刊されている。

小説『人間革命』は「創価学会の精神の正史」と位置づけられている(池田 2012:5)。創価学会は2023年の年間テーマを「青年・凱歌の年」と掲げた。この年の活動方針にも、「創価の精神を学ぶ『信心の教科書』、である小説『人間革命』『新・人間革命』の熟読・研さんに、より力を入れよう」と記されている(『聖教新聞』2022.11.12)。佐藤優は『21世紀の宗教改革——小説「人間革命」を読む』と題する書を2019年に刊行した。これは『人間革命』第1巻を素材として、「創価学会の内在的論理を解き明か」すために執筆された書である。その中で佐藤は、「創価学会の存在論的平和主義を学ぶために最良のテキストが『人間革命』だ。(中略)この『人間革命』の書き出しに、平和を希求する池田大作氏の思想が凝縮されている」と述べている(佐藤 2019:18-9)。佐藤はまた、『池田大作研究——世界宗教への道を追う』と題する書を2020年に刊行している。その中で佐藤は、「池田の『人間革命』と『新・人間革命』の解釈を抜きにして創価学会の内在的論理をとらえる

ことはできない」としている（佐藤 2020：146）。

小説『人間革命』の影響は、日本国内に止まるものではない。現在、『人間革命』は英語、フランス語、ドイツ語、スペイン語、イタリア語、ポルトガル語、韓国語、中国語、オランダ語の9言語に翻訳・出版されている（①：3）。イギリスの歴史学者であるアーノルド・トインビーは、英語版『人間革命』に序文を寄せている。その中で、トインビーは次のように述べている。「彼（＝戸田城聖）の指導のもと、そして彼の後継者である池田大作の指導のもと、創価学会は驚異的な戦後の復興を遂げた。それは、経済分野における日本国民の物質的成功に匹敵する、精神的偉業であった」。「戦後の創価学会の興隆は、単に創価学会が創立された国（日本）だけの関心事ではない。池田氏の本書がフランス語や英語に訳されている事実が示すように、創価学会は、既に世界的出来事なのである」（『池田大作とその時代』編纂委員会 2022：138）。世界的な民間組織「ローマ・クラブ」を創設したアウレリオ・ペッチェイも、池田との対談集を刊行した一人である。初めて池田と会ったとき、ペッチェイは『人間革命』を手にしていて（『池田大作とその時代』編纂委員会 2022：145-7）。また、「現在、インド創価学会では、小説『人間革命』『新・人間革命』を学ぶことも、主な活動の柱となっている」という（『池田大作とその時代』編纂委員会 2022：130）。

ところで、本稿は小説『人間革命』第2版を素材としている。1990年には第二次宗門事件が顕在化していた。『人間革命』を『池田大作全集』に収録するにあたり、「宗門が、広宣流布を推進してきた仏意仏勅の団体である創価学会の崩壊を企て、破門し、仏法破壊の元凶と成り果てた今、『人間革命』をそのまま、全集に収録してよいのか」との問題が提起された。そこで、著者は『人間革命』を改訂し、『池田大作全集』には『人間革命』第2版が掲載されたのである（池田 2012：7-11）。『池田大作全集』は単行本2冊ずつを1冊にまとめ、第144巻から第149巻までの6巻にわたって収録し、2012～13年にかけて刊行されている（池田 2012-3）。その後、聖教ワイド文庫にはこの第2版を収め、2013年に全12巻が刊行されている（池田 2013、①：3-4）。

本稿は、小説『人間革命』全12巻を分析対象とする。そして、創価学会の機関紙『聖教新聞』の公式サイトである「SEIKYO online」の「人間革命検索サービス」を利用している（聖教新聞社 2023）。同サービスで『人間革命』全12巻を対象とし、キーワードを「戦争」で検索した。その結果、248のページが該当した。本稿では戦争に言及したこれらのページを、まず量的に考察する。ここでは各巻のページ数、方向、分野を明示する。次に、10に区分された分野から5つの要素を抽出し、それぞれを質的に考察する。ここでは量的考察における分野別のページを基盤として、各要素における論調を浮き彫りにする。こうした作業により、『人間革命』の戦争観を全体として解明しようと試みている。

2. 「戦争」の量的考察

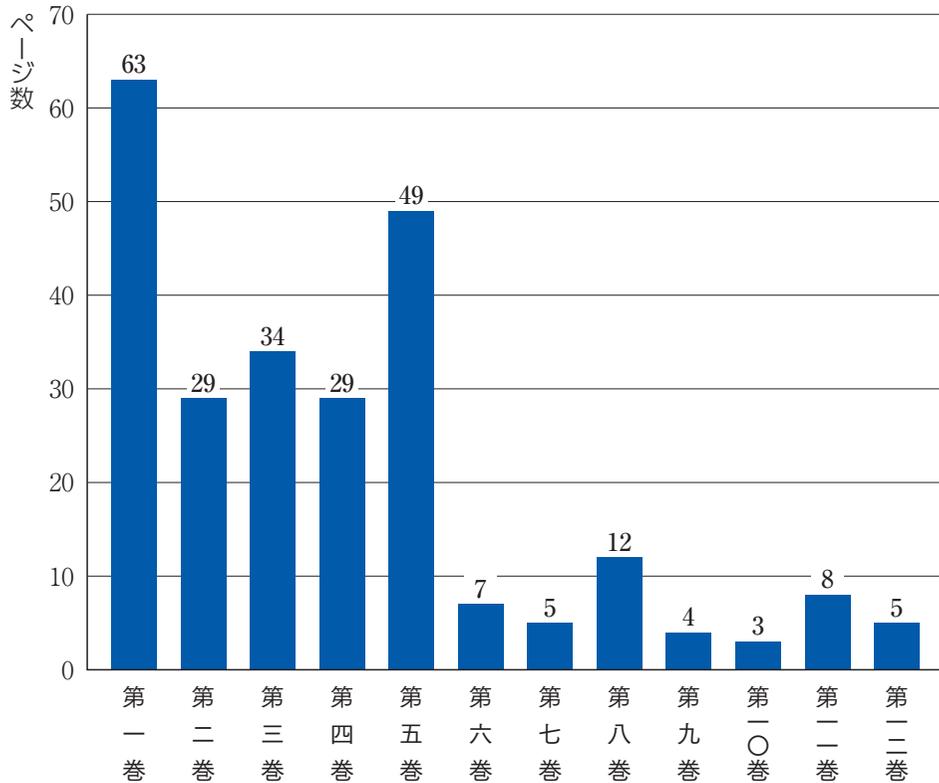


図1 小説『人間革命』における「戦争」のページ数

まず、小説『人間革命』では第1巻から第5巻を中心に、すべての巻で戦争に言及している。図1は『人間革命』各巻で戦争に言及したページ数を示している。第1巻「黎明」の章では9ページにわたり戸田城聖の出獄、「再建」(7ページ)では戸田の事業と創価学会の再建が描かれている。「終戦前夜」(20ページ)では太平洋戦争終結の歴史、「占領」(13ページ)ではマッカーサーの対日占領政策が取り上げられている。「一人立つ」(6ページ)、「千里の道」(5ページ)は敗戦直後の創価学会が話題となっている。第2巻「序曲」の章では16ページにわたり対日占領政策における憲法問題が論じられ、「車軸」(5ページ)では敗戦直後の日本経済が描かれている。第3巻「宣告」の章では25ページにわたり東京裁判について記されている。第4巻「疾風」の章では19ページにわたり日本の防衛問題と核兵器廃絶が論じられ、「怒濤」(5ページ)では朝鮮特需が話題となっている。第5巻「戦争と講和」では36ページにわたり朝鮮戦争と対日講和が取り上げられている。

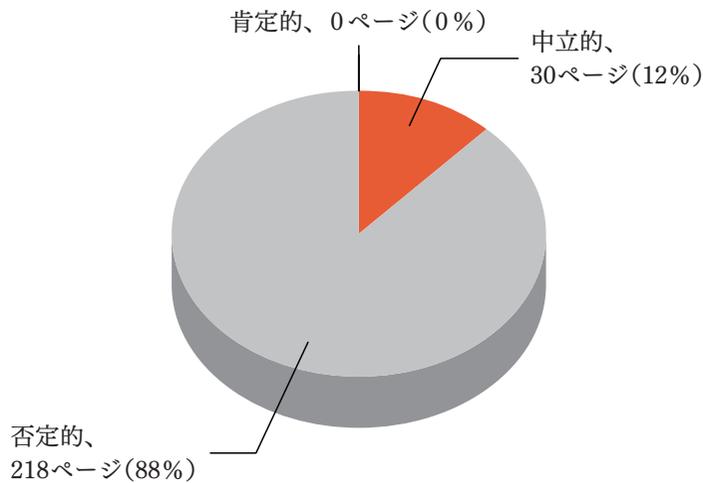


図2 小説『人間革命』における「戦争」の方向

次に、小説『人間革命』は戦争を否定的に記述している。図2は『人間革命』全12巻で戦争に言及したページの方向を示している。戦争を肯定的に記述したページは0、戦争を中立的に記述したページは30、戦争を否定的に記述したページは218となる。

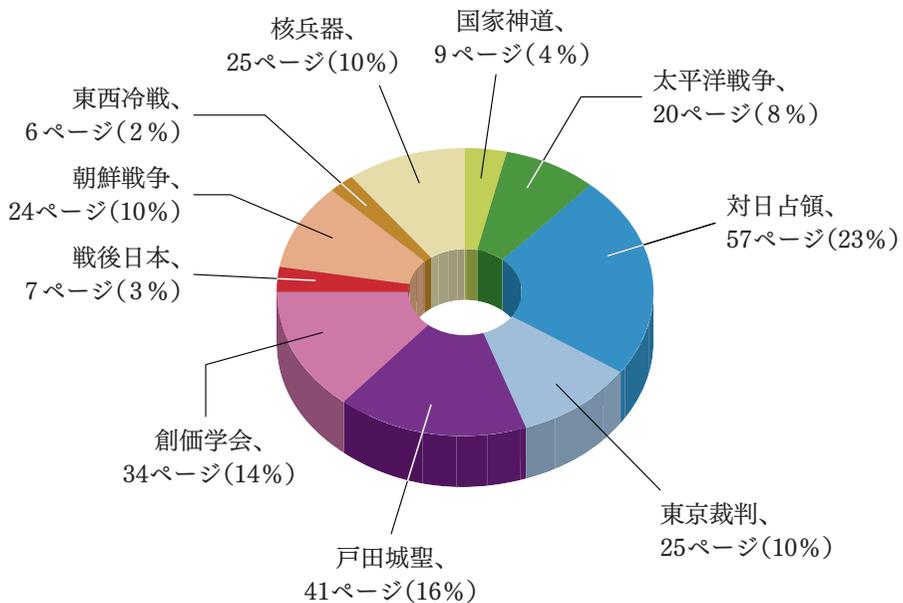


図3 小説『人間革命』における「戦争」の分野

さらに、小説『人間革命』は戦争について、戦後日本の10に及ぶ分野を取り上げている。図3では、『人間革命』全12巻で戦争に言及したページ数とその割合が分野別に示されている。ページ数が多い順に「対日占領」57、「戸田城聖」41、「創価学会」34、「核兵器」25、「東京裁判」25、「朝鮮戦争」24、「太平洋戦争」20、「国家神道」9、「戦後日本」7、「東西冷戦」6となっている。

3. 大東亜共栄圏の墓標——国家神道と太平洋戦争

1939年、日本政府は宗教団体法を制定した。この法律により各宗派は強制的に合同させられ、すべての宗教は国家統制の下に置かれることになる。「宗教界はこぞって、天照大神を祭り、天皇を絶対とする挙国一致の報国運動に同調していった」。世界大戦が始まると国家神道を中心とした祭政一致の政治形態は「神がかり的な全体主義の権力を、容赦なく国民のうえに振るい始めた」。この権力が「戦争遂行のための思想統一を進め、無謀な侵略戦争に、一国を駆り立てていったのだ」。宗教を手段として国民を支配する権力は、大いなる悲劇を招くことになる(①:254)。

1941年12月に太平洋戦争が始まった。開戦時の日本の勝利は長続きせず、1942年6月のミッドウェー海戦に敗北した。8月にはアメリカ軍のガダルカナル反攻が始まった(③:116)。偏狭な国家主義を奉じた戦時の日本は、軍部が政治の実権を握り、軍事力をもって無謀な戦争を押し広げた。その背景には「絶対不可侵とされる天皇の統帥権を笠に着て、戦争政策を左右していった軍部の暴走があったこと」も知られている。そして、「神国日本をアジアの盟主とうたい上げる『八紘一字』のスローガンや、『聖戦』の名のもとにアジアに戦火を拡大した指導方針の精神的支柱には、国家神道の国粋思想があったのである」(⑥:243)。国家権力を背景とする天照大神への信仰は次第に強まっていった。これは「戦争遂行のための思想統一であった」。天照大神を拝まなければ「反戦思想の持ち主」であり「国賊」とされた(①:228)。

太平洋戦争末期から日本には飢餓が迫り、民心は軍部指導層から離れていた。政府は本土決戦を叫び「一億玉砕」を説き続けたが、戦意は次第に失われていった(①:58)。「まさしく戦争は、極悪中の極悪である。罪のない国民までを道連れにし、犠牲にしていく戦争を、断じて、この地球上から除かなければならない」(②:295)。太平洋戦争終戦間際には、米ソの対立が兆し始めていた。「人間は、権力の絶頂に上ると、皆、暴君的な一面をもつと同じように、大国になればなるほど、いよいよ暴君的な色彩を増す」ものである。日本はソ連を仲介として連合国との和平交渉を望んでいた。しかし、当時のソ連は対日参戦を準備していたのである(①:105)。日本政府は連合国の動きを分析することすらできなかった。「一切の基盤となるのは、民間人と民間人との交流であり、人間と人間の信頼の絆である。い

わば鉄の鎖のように強い、心の結びつきである。この民衆次元の幾重もの交流こそが、平和の大河となるのである」。しかし、独裁的な軍部政府は「神州不滅」を叫び「本土決戦」を呼号するだけであった (①:106)。「国民を愚弄した政治や指導者が、長続きたためしはない。国民を欺いての戦争政策は、自縄自縛に陥っていたのである」(①:107)。

1945年7月26日、ポツダム宣言が発表された。7月30日には、日本の首相が同宣言を「黙殺」するとの談話が世界を駆け巡った。軍部政府はポツダム宣言を理解する余裕をも失っていたのである (①:108)。軍部政府には戦争の終結方式について指導理念がなく、すべてが支離滅裂であった (①:109)。8月9日にはアメリカが長崎に2発目の原爆を投下し、日本に宣戦布告したソ連は満州に侵攻した (①:115)。8月14日、最後の御前会議で無条件降伏が決定した。「それまでも戦争終結の機会があったが、軍部の暴走を抑え、和平への大英断を下すことができる指導者がいなかったのである。残念なことには、明治の名外相、小村寿太郎のような、命をかけて活躍する人物がいなかったのだ」(①:119)。

1945年12月15日、GHQは神道指令を出した。これにより国教は禁止され、神道も他の宗教と同じ扱いとなった。明治政府の成立から敗戦までの77年間、「国家神道は、忠君愛国を国民に植え付ける宗教、としての役割を担ったのである」(⑥:243)。軍部は国家神道を利用して「大東亜共栄圏の野望」を実現しようとした。「戦争の指導理念に仕立て上げられた国家神道は、その無力を余すところなく露呈して、遂に悲惨な結末をもたらすこととなったのである」(①:132)。

4. マッカーサーの微笑み——対日占領と東京裁判

1945年8月30日、連合国軍最高指令官のダグラス・マッカーサーは厚木飛行場に到着する。それ以来、1951年4月に最高司令官を解任されるまで、5年8ヵ月間その任にあった。戸田城聖には、マッカーサーが梵天として映っていた (①:153、184)。彼の占領政策は、占領軍のもとに日本政府が存続するという間接統治方式である (①:174)。来日後のマッカーサーの言動は、日本人の中にあるアメリカ憎しの感情を薄れさせていく (①:160)。彼は連合国軍最高司令官として、日本を「民主的で平和を希求する模範の国」に仕立て上げることに、すべてを捧げようとしていた。とりわけ、最初の2年間の占領政策は、理想主義的な色彩が強かった (①:158、185)。GHQ(連合国軍総司令部)は、1945年9月に戦争犯罪人への本格的な追究を始めている。また、10月から12月まで民主化の基本政策を次々と指令していったのである (①:189)。

マッカーサーは日本に二度と戦争のできない憲法を制定しようとしていた。彼は「恒久平和をめざす民主国家を、自らの手でつくり上げたいという理想に燃えてい

たにちがいない」(②:71)。しかし、天皇の戦争責任が世界中で注目されていたとき、日本政府は天皇制統治機構の維持に全力を注ぎ、旧体制の復活を目指していた。「これほどの見当違いが、政府最高首脳によってなされていたのだった。時代の潮流を知らず、先見の明もない国家的指導者の愚劣な姿が、そこにはあった」(①:178)。マッカーサーは、日本政府に民主的な憲法を立案することはできないと判断するに至る。1946年2月3日、彼はGHQ 民政局に憲法改正草案の作成を指示した。その際、「①元首としての天皇の地位、②戦争放棄、③封建制度の廃止」を必ず草案に盛り込むべきとした。GHQ は憲法草案を早くも2月12日に完成させた(②:77)。そして、この年の11月3日、憲法改正案は「日本国憲法」として公布されたのである(②:86)。新憲法の中でも「戦争放棄をうたった憲法第9条の精神は、世界がめざすべき平和の理念であり、この精神こそ、永遠に堅持し、掲げ続けていくべきものであろう」(②:80)。しかし、東西冷戦の激化によってアメリカは世界戦略を変更し、日本を防衛基地化する必要があった。そこで、マッカーサーは憲法第9条の戦争放棄は自衛権を否定するものではないと、新たな解釈を加えたのである(④:194-5)。「時代の変化のなかで、憲法の平和主義の精神を守り抜いていくためには、政治の根底に、確固不動なる生命尊厳の哲学、思想が不可欠である」(②:87)。マハトマ・ガンジーの「宗教の欠如した政治は、国家の首を吊るロープであります」との言葉を、政治家も国民も心に刻むべきであろう(②:88)。

1946年5月3日、東京裁判が開廷された。これは日本の重要な戦争犯罪人に対する極東国際軍事裁判である(③:58)。検察の冒頭陳述に次ぐ立証段階では、数々の秘史が暴かれていった。満州国成立までの経緯、南京虐殺事件、「バターン死の行進」をはじめとする事実が国民に驚愕する。日本軍部の戦時の言論統制による目隠しを取り払われたのである(③:251)。東京裁判の法律的な根拠は薄弱であった(③:248)。インドのパール判事は、被告たちの「無罪」を主張した。東京裁判は不正で不合理な裁判であり、人類の平和に寄与するものではないと指摘したのである(③:266、270)。「ともすれば、勝者が敗者を裁くということは、いかに法律的な装いを凝らしても、結局、執念深い復讐となりかねない」(③:267)。

パールの意見書には、東洋的な哲理に根ざした英知がちりばめられていた。西欧近代に由来する思想がすべて行き詰まったとき、東京裁判でパールが示した東洋的発想は重要な示唆をもたらすであろう(③:272)。仏法は「大宇宙を貫く大法に合致し、慈悲と智慧に満ち満ちた、何ものにも揺るがぬ『仏の生命』を、わが『生命』に脈動させること。そこに、崩れざる幸福と平和への道が開かれること」を教えている。パールはその場所に限りなく近づいていたのである(③:282)。1948年11月12日に終幕となった東京裁判は、2年6ヵ月余りに及んだ。幾多の矛盾をはらみつつ、軍国日本の積年のウミを出し続けた(③:254)。しかし、解決されねばならないさまざまな問題を残したまま幕を閉じたのである(③:282)。世界の人々に

とって、東京裁判の終結は第二次世界大戦の終わりを意味した(③:236)。「最も深刻なショックを受けたのは、日本の民衆であった」。東京裁判の判決は「敗戦の詔勅に次ぐ、第二の衝撃であったにちがいない」(③:238)。彼らは「無条件降伏」の意味を肌で感じた。戸田城聖は、これら戦犯者から大きな被害に遭った一人であった。彼は「一国が誤った宗教を尊崇し、正法を弾圧する時、梵天・帝釈が治罰を加えさせる——という仏法の法理が、かくも正確に、最後の裁判まで貫かれた実証を見たのである」(③:239)。

1948年秋、アメリカは対日政策を転換することになる。対日講和条約は延期され、米軍駐留は継続されることになった。日本を「東側陣営への『防波堤』としての役割を担う親米国にすることへと、変化していった」のである。東西冷戦の影響により、日本は単独講和方式による条約締結を余儀なくされていった(⑤:192)。その後、1951年9月4日から8日にかけて、アメリカのサンフランシスコで対日講和会議が始まった。参加国は日本を含めて52カ国であった(⑤:204)。対日講和条約は会議の最終日に締結された。また、この日には日米安全保障条約も締結されている。しかし、独立後の日本には「地球上のあらゆる国々と、平和と友好の絆を強めていくこと」が求められる。「第1に、中華人民共和国とは、万難を排しても友好の絆を結ぶことである」(⑤:211)。日中友好は「アジアの安定と繁栄、世界の平和へと、深くつながっていくにちがいない」からである(⑤:214)。

5. 恒久平和のともし火——戸田城聖と創価学会

1945年7月3日、戸田城聖は豊多摩刑務所を出所した(①:15)。「日本国民に神社の礼拝を強制することの非論理的、非道徳的ゆえんを説いた」戸田は、1943年の夏から2カ年の拘留所生活を送ったのである(④:32)。近代日本は国運を賭しての戦争を繰り返し、民衆に多大な犠牲と不幸を押し付けてきた。「こんな、ばかげたことを、いつまで、やっているんだ!」(①:20)。彼は国中の家庭を破壊した戦争に激しい怒りを覚えた(①:50)。1945年の秋、戸田は日蓮大聖人の仏法から一つの生命の法理を悟った。日本が不幸な戦争に突入し、戦後も悲惨な生活を余儀なくされたという現実、諸天善神が働かなかったからであり、時代と社会に正しい指導理念がなかったからである。「善神が国を捨て去り、天に上っているとする、日蓮大聖人の『神天上の法門』とは、こうした現象を教える法理といえる」(①:247)。

1946年11月、新憲法公布の頃に戸田城聖は思った。人間という根本の次元からあらゆる主義、思想を人類の平和と幸福ヘリードしゆく新たな理念が求められている。それは必ずや日蓮大聖人の仏法の生命哲理から生まれる。「広宣流布とは、まさしく、永遠の平和を地上に具現することであり、それは、仏法の慈悲と平和の哲理が、人びとの精神の大地に、深く打ち立てられていくところから達成されるの

だ」(②:91)。

1948年11月12日、東京・市ヶ谷では東京裁判の最終判決が行われた。ここで、A級戦犯被告25人全員が有罪と判定され、それぞれの刑が宣告された。戸田城聖は「あの裁判には、二つの間違いがある」と言った。一つに「死刑は絶対によくない。無期が妥当だろう」。二つに「原子爆弾を落とした者も、同罪であるべきだ。なぜならば、人が人を殺す死刑は、仏法から見て、断じて許されぬことだからだ」。どんな理由があっても原爆の使用は「悪魔の仕業」である。「戦争に勝とうが、負けようが、悪魔の爪は、人類の名においてもぎ取らなくてはならぬ。原爆の使用者は、戦犯として同罪にすべきだ」と話している(③:240)。

戸田城聖の目には、1950年6月に始まった朝鮮戦争が「世界動乱の縮図」に映った。彼はこの戦争から「隣国の民衆が味わわなければならない塗炭の苦しみ」に深く思いを馳せた(④:291)。1951年3月に開かれた臨時総会の講演で、戸田はこう語っている。「この戦争によって、夫を失い、妻を亡くし、子を求め、親を捜す民衆が、どれほど多くなっているか、それを嘆くものであります。昨日までの財産を失って、路頭に迷い、悲しみ苦しんで死んでいった人もいます。昨日までの財産を失って、路頭に迷い、悲しみ苦しんで死んでいった人もいます(⑤:35)。1951年5月号の『大白蓮華』には戸田の巻頭論文「朝鮮動乱と広宣流布」が掲載された。彼はその中で、「きのうは日本の身の上、きょうは朝鮮の身の上、あすはまたいづこの国の運命とやせんと、世界民衆を憂えるとともに、仏の金言むなしからざるを思い、かつはこの騒乱のすがたこそ、日蓮大聖人の仏法が東洋に広宣流布する兆なりと確信するがゆえである」と論じている(⑤:186)。

1951年6月、本部婦人部委員会が新宿で結成された。当時、「自由主義国と共産圏諸国との激突が、その接点である韓・朝鮮半島³⁾の民衆の犠牲のうえで行われていた」。日本は「この戦争による受注で、思いもかけぬ特需景気に酔っていた」。参加者の一人である、釜山生まれの柳沢礼子には憤りがあった(⑤:99)。「この戦争で祖国の民は苦しみ、国土は荒廃している。そして、人が殺し合っている。それなのに、その陰で裕福になっていく国があり、人びとがいる。なんとあさましい現実ではないか」。柳沢は同胞の悲惨さに耐えられなくなり、東洋広布を願わずにはいられなかった。戸田は一人東洋広布の必然性を叫んでいた。「その実践の第一歩ともいべき萌芽が、目立たぬ婦人部の一角から兆し始めて」いたのである(⑤:100)。

1952年2月17日、墨田区の常泉寺で青年部研究発表会が開催された。講評に立った戸田城聖は、「地球民族主義」という言葉を口にした。現代国家は戦争を回避するどころか、大きな障害になっている。仏法は「人間の原理」を主として説いたものであり、「国家の原理」は従となっている。しかし、これまでの国家観は国家が主であり、人間が従であった。この主従の転換がなされなければ、戦争は避けられないであろう。「戦争という大量の殺し合いを行う国家は、『殺』を人間の最大の罪

悪とする思想から見る時、悪の権化と映るはずである。国家の名において行われる『殺』の行為だけが、許されていいはずは絶対はない」(⑤：295)。現在の国家は封建時代の藩に例えられる。それは地域的・民族的な自治体の機関である。将来、地球民族主義を根底とする世界連邦政府のような機関が樹立されたとき、戦争が抑制されていくはずである。「私たちの言う広宣布とは、人間根本の絶対平和主義による、仏国土の出現を意味しているといえよう。そうであってみれば、戸田城聖の言うように、全人類を運命共同体とした地球民族主義が、旧来のさまざまな国家観に取って代わる時代を、当然、築くべきなのである」(⑤：296)。

1954年3月、第五福竜丸事件が発生した。太平洋上に浮かぶビキニ環礁で行われたアメリカの水爆実験により、一隻の日本のマグロ漁船が被曝したのである。この年の8月に原水爆禁止署名運動全国協議会が結成され、翌年の8月には広島で第1回原水爆禁止世界大会が開催された。戸田城聖も、世界的に広がる原水爆禁止の署名運動を目にしていた。彼が実践してきた広宣布の戦いも、「その目的とするところは、すべての人びとの生命の変革による、全人類の恒久平和の実現にはかならなかった」。日々の宗教活動は地味ではあるが、署名運動よりも「根気と、忍耐と、研鑽と、努力」が必要となる。しかし、彼はこれが「最も根源的で着実な生命変革の運動であると確信し、胸中深く誇りと自信とをいっていた」。そして、この活動が「一人ひとりの民衆を救うと同時に、一国の宿命を転換し、やがては人類の宿命の転換さえも可能にする、現代における唯一最高の運動であると自覚していた」。その運動によって「根本的な平和を構築することに、彼は全生涯をかけていたのである」(⑧：239)。

6. オモ二⁴⁾の慟哭——戦後日本と朝鮮戦争

「戦争も悲惨なら、戦後も悲惨であった」。1946年5月19日、皇居前広場に25万人が集まり、「食糧メーデー」が行われた。ここで「朕はタラフク 食ってるぞ ナンジ人民 飢えて死ぬ ギョメイギョジ」とのプラカードも掲げられていた。多くの民衆は、ただ食糧が欲しかったのである(①：358)。1947年の暮れになっても、日本国民は生活難にあえいでいた。激動する世界は東西冷戦という見えざる戦争に翻弄され始めていた。「それは、まさしく暗闇へ世界を動かし始めた軸であった」(②：341)。

1950年6月25日、北朝鮮軍が38度線を越えて韓国に進撃したとのニュースが日本を駆け巡った。冷戦のなかで突如始まった熱戦である。それ以来、韓・朝鮮半島では3年1ヵ月にわたって同胞同士的大量殺戮が展開された(④：233)。第三次世界大戦の危機を孕んだ朝鮮戦争により、アジアの一角は「殺戮と破壊の修羅場」と化した(⑤：157)。北朝鮮軍は6月28日には首都ソウルを占領した。国連では、緊急

の安全保障理事会が開かれた。アメリカが提出した、北朝鮮に対して侵略行為の停止と撤退を要求する決議案が採択されたのである (⑤:158)。7月7日、国連安全保障理事会は国連軍の創設を決議し、マッカーサーが国連軍最高司令官に任命された。しかし、国連軍は半島の南東部に追い詰められていく。韓・朝鮮半島統一の主導権を争う内戦は、初めから国際戦争の様相を呈していた。この戦争は自由主義陣営についての韓国と共産主義を掲げる北朝鮮の対立が原因であった。そして、東西冷戦のもとで両勢力の衝突となっていった。「要するに大国は、その勢力の確保と威信をかけて、小国の国土で、小国の住民の犠牲において戦争を行ったのである」。大国はそれを「限定戦争」と呼ぶ (⑤:160)。

朝鮮戦争が始まると、占領下の日本はアメリカ軍の基地と化した。GHQの指令による、日本の再武装計画が実施されていくことになる (④:238)。GHQは直接内政に介入するようになり、マッカーサーは「警察予備隊」の新設を指令してきた (④:239)。日本は国内の治安組織を改変し、戦争協力へと移行し始めた (④:288)。朝鮮戦争の開始以来、日本経済は急速に回復し成長していく。1950年以降、日本の産業は重化学工業を中心に著しく発展していった (④:289)。しかし、この経済回復は外国の戦争によるものであった。日本の企業が被害を受けることはなかった。韓・朝鮮半島での戦争が激しくなり、破壊と犠牲が増すほど、日本経済は大きな利益を得たのである。「わが国の高度経済成長への第一歩は、戦火のもとの民衆の悲惨を踏み台としていたことを忘れてはならないであろう」 (④:290)。

1950年9月15日、アメリカ軍は半島中部の仁川へ攻撃を始めた。仁川上陸作戦である。北朝鮮軍は総崩れとなって退却した。9月28日に国連軍はソウルを奪還し、10月1日にはほぼ開戦時のラインまで進んだ (⑤:161)。「北朝鮮軍の撃滅」を指令していたマッカーサーは、この日、北朝鮮に無条件降伏を要求した (⑤:162)。10月7日の国連総会で可決された8カ国提案は、国連軍の目的が韓・朝鮮半島における国家統一にあるとし、38度線を越えての北進を承認したのである。「国連は、重大な方針転換をしたことになる。朝鮮戦争の泥沼化の大きな要因の一つは、ここにあったといえるであろう」 (⑤:163)。10月20日には韓国軍とアメリカ軍が平壤を占領した (⑤:165)。

ソ連のスターリンは戦況の悪化をみて、中国に北朝鮮への援軍派遣を要請した (⑤:166)。1950年11月24日、アメリカ軍と中国人民志願軍との激しい戦闘が始まった。国連軍は総崩れとなった。11月30日、アメリカのトルーマン大統領は「朝鮮戦線で原爆使用をも考慮していると発言したのである」 (⑤:169)。12月6日、中国人民志願軍と北朝鮮軍は平壤に入り (⑤:170)、1951年1月4日にはソウルを占領した。「地獄の戦場と化した半島では、何百万という人びとが戦火に巻き込まれて、家を失い、家族を奪われ、故郷を追われて逃げまどい、さまよっていた」 (⑤:171)。1949年に中華人民共和国が成立したことは、アメリカのアジア政策に脅威を

与えていた。「マッカーサーは、朝鮮戦争の拡大によって、アジアにおける共産主義との決戦に挑もうとしたのである」(⑤：175)。

1951年の5月に入り、中朝軍の力は尽きていった。6月になると、ソ連はアメリカとの和平を働きかけていく(⑤：180)。7月10日に38度線の南にある開城で休戦会談が開かれ(⑤：182)、10月25日には場所を板門店に変えて会談が再開された(⑤：183)。「スターリンは、停戦を考慮する一方で、戦争を長期化させて、アメリカの国力を弱め、同時に国際政治での優位な立場を得ようと考えていたようだ」。1953年7月27日、米ソ両国での指導者の交代を経て、板門店で休戦協定が調印された(⑤：184)。3年余りに及んだ戦争により韓・朝鮮半島の全土が焦土となり、参戦国で少なくとも3百数十万人の死者を出し、朝鮮戦争は終息した(⑤：184-5)。

7. 原水爆禁止宣言——東西冷戦と核兵器

1945年4月にアメリカのルーズベルト大統領が死去すると、新大統領のトルーマンは「米ソの対立の兆しを早くも読み取っていた」。この年2月のヤルタ会談で取り決められたソ連の対日参戦を、トルーマンは歓迎していなかった。「それは、戦後のソ連勢力の拡大を、少しでも抑制するためにほかならない」(①：104)。そして、8月に日本が降伏すると、「中国大陸では国民党軍と共産党軍との対立が残った」。アメリカは中国を「アメリカに友好的な極東の安定勢力」とするため、国民党政府に膨大な援助を与えていく(③：186)。それにもかかわらず、1949年に中国共産党は中華人民共和国の成立を宣言した。ソ連を中心とした共産主義勢力の拡大に対し、アメリカは「世界的規模で反共体制の強化を図らずにはいられ」なかった。アメリカにとって、日本は「ソ連・中国に対する反共の防波堤」となる。「世界の各地で小競り合いが絶え間なく起こったのは、東西に世界を分かったアメリカとソ連の、それぞれ世界を制覇しようとする野望のゆえ」であった(③：188)。

1945年8月におけるトルーマン大統領の原子爆弾投下は、戦争の早期終結のためだけではなかった。彼は「戦後の国際政治で、ソ連に対して優位に立つ」ことを目論んでいた。ソ連が日本に参戦する前に勝利を収めるため、戦争終結を急ぐ必要に迫られていたのである」。広島原爆投下は「第二次大戦の終幕ではなく、米ソ冷戦の序幕の轟音」でもあった。日本はその犠牲となったのである。「この不運な宿命に思いをいたすならば、日本こそが、戦争のない平和な世界を、一日も早く現出しなければなるまい。われわれは、その崇高な使命をもつ一員であることを、強く自覚したいものだ。戦争だけは、今後永久に、断じて起こしてはならないのである」(①：111-4)。

1950年3月、スウェーデンのストックホルムで平和擁護世界大会委員会総会が開催された。ここで採択された決議は、ストックホルム・アピールと呼ばれる。この

アピールは「恐怖の武器であり、大量殺戮兵器である原子爆弾の絶対禁止を要求」し、「いかなる国に対してであれ、最初に核兵器を使用する政府は、人類に対して罪を犯すものであり、その政府は、戦争犯罪人として、取り扱われるべきである」と訴えている。このアピールは世界に署名運動の大波を起こした。8ヵ月の間に5億人の署名が集まっている(④:211-2)。

1957年9月8日、横浜・三ツ沢の陸上競技場で創価学会青年部東日本体育大会が開催された。他界の前年となるこの大会において、戸田城聖は次のような遺訓を残した。

核あるいは原子爆弾の実験禁止運動が、今、世界に起こっているが、私はその奥に隠されているところの爪をもぎ取りたいと思う。それは、もし原水爆を、いずこの国であろうと、それが勝っても負けても、それを使用したものは、ことごとく死刑にすべきであるということを主張するものであります。(中略)なぜかならば、われわれ世界の民衆は、生存の権利をもっております。その権利をおびやかすものは、これ魔ものであり、サタンであり、怪物であります。それを、この人間社会、たとえ一国が原子爆弾を使って勝ったとしても、勝者でも、それを使用したものは、ことごとく死刑にされねばならないことを、私は主張するものであります。たとえ、ある国が原子爆弾を用いて世界を征服しようとも、その民族、それを使用したものは悪魔であり、魔ものであるという思想を全世界に広めることこそ、全日本青年男女の使命であると信ずるものであります。(④:214-5)

この原水爆禁止宣言は、「創価学会の平和運動の原点」となった。「戸田のこの声明は、暗夜の海に輝く灯台のように、進むべき進路を照らし出したのである」(⑫:139)。

1961年9月、アメリカ大統領のジョン・F・ケネディは第16回国連総会で演説した。「すべての男、女、子供は、ダモクレスの核の剣が、きわめて細い糸でぶら下がり、偶発事故や誤算や狂気で、いつ何時切り落とされるかも知れない状態の下に生きている」。核時代という未曾有の危機にあつて、ケネディは「核戦争を開始する権限が、自分にあるという事実から、目をそらすことはできなかった」(④:204)。核保有国の指導者の一人であるケネディは、「20世紀のダモクレス」であった。そして、身震いするような最後の決断を下す義務が常に突き付けられている指導者は、少なくとも核保有国の数だけいる。「核戦争という破滅的人災の決定権は、人類のなかで、わずか数人の掌中にあるとあってよい」(④:206-7)。「核戦争の恐怖を取り除くには、有害無益な核兵器を、互いに全廃することを話し合い、決議すればよい」のである。「人間の良心と、英知を信じるなら、これに異議を唱え

る指導者など」あってはならない。「もし、あったとしたら、それは魔ものにちがいない。ヒトラーより幾千倍の悪党だ。世界の世論は、その指導者を絶対に許さぬであろう」(④:208)。

しかしながら、世界は20世紀後半から「核爆弾に覆い尽くされる恐怖の時代」に入ったと言わざるを得ない。1962年10月のキューバ危機では、「米ソが一触即発の核戦争の瀬戸際」にあった。その後も、米ソの核開発競争は止むことがなかった。1968年初頭における米ソの核保有量は、広島型原子爆弾の250万発分となる。「これは、人類を何十回、いな何百回と殺傷し尽くせるほどの、恐るべき量になる」。核戦争を考えると、過去の戦争の常識は通用しない(④:200-2)。

むすび

本稿では池田大作が著した小説『人間革命』の存在意義を確認した。佐藤優は『人間革命』に示される「池田氏の戦争観を基準に据えて国際情勢を読み解くこと」が重要であると述べている。池田思想を基準とすれば、ウクライナ危機では民衆に目を向けるべきこと、一人のトップを完全な悪人として捉えないことが前提となる。また、佐藤は池田思想の根源的な反戦思想、対話を重視する姿勢に学ぶべきであるとしている。『人間革命』は「創価学会の精神の正史」であり、佐藤によれば「創価学会の存在論的平和主義を学ぶために最良のテキスト」である。『人間革命』は現在9言語に翻訳・出版され、世界にも影響を与え続けている。

次いで、本稿では小説『人間革命』を量的・質的に考察した。『人間革命』の量的考察では、第1巻から第5巻を中心に、全12巻で戦争に言及している。また、同書は戦争を否定的に記述し、戦後日本の10にわたる分野を取り上げている。『人間革命』の質的考察では、1つに国家神道と太平洋戦争の分野から「大東亜共栄圏の墓標」という要素が浮かび上がる。日本の軍部は国家神道を利用して、大東亜共栄圏を実現すべく太平洋戦争に突入した。これにより膨大な人命が失われ、国は滅びたのである。2つに対日占領と東京裁判の分野からは、「マッカーサーの微笑み」という要素が導かれる。彼は連合国軍最高司令官として、日本を民主的で平和な国にしようとした。特に、最初の2年間は理想主義的な占領政策が採られた。3つに「恒久平和のともし火」との要素は、戸田城聖と創価学会の分野に基づいている。戸田をはじめとする創価学会が実践した広宣流布の戦いも、その目的はすべての人々の生命変革による、恒久平和の実現であった。この運動によって根本的な平和を構築することに、戸田は全生涯をかけていた。4つに戦後日本と朝鮮戦争の分野から、「オモニの慟哭」との要素が導かれる。韓・朝鮮半島では3年余にわたり同胞同士的大量殺戮が展開され、この地は殺戮と破壊の修羅場と化した。朝鮮戦争が始まってから、日本経済は急速に成長していく。しかし、この経済回復は隣国の戦

争によるものであった。5つに東西冷戦と核兵器の分野からは、「原水爆禁止宣言」という要素が浮かび上がる。広島原爆投下は米ソ冷戦の序幕であった。20世紀後半以降、米ソの核開発競争により人類の抹殺が可能となった。戸田城聖の原水爆禁止宣言は、創価学会の平和運動の原点と位置づけられる。

以上の考察から、小説『人間革命』の戦争観には以下の特徴を指摘することができる。第1に、「人間主義」である。『人間革命』は一貫して民衆の視点から戦争を描き、戦争指導者の人間性に目を向けている。そして、一人ひとりの人間革命が物語の主題となっている。第2に、「平和主義」である。『人間革命』はその冒頭から戦争に絶対反対する立場を表明し、全巻にわたって戦争を否定的に論じている。そして、核兵器はこの世から消し去る以外にないと訴えている。第3に、「地球民族主義」である。『人間革命』は国家主義に囚われることなく、常に世界市民の立場から戦争を論じている。そして、あらゆる国々との友好を訴え、民衆次元の交流を提唱している。これらの特徴は、日蓮仏法に根ざした仏教的人間主義⁵⁾から派生していると言えよう。『人間革命』は、仏教的人間主義の視点から戦争を観ているのではないだろうか。

小説『人間革命』という一条の光が、戦争の闇を照らし続けている。

注

- 1) 文献を示す割注において、『人間革命』は「聖教ワイド文庫」の巻数とページを記すことにする。例えば、(①:1)は「『人間革命 第1巻 第2版』1ページ」のことである。また、『人間革命』から直接引用する場合、本文中の改行によって生じたスペースは省略している。
- 2) 池田大作のテロリズム論については、宮川(2007)がある。
- 3) 大韓民国では朝鮮半島を韓半島と呼称する。そのため『人間革命』では「韓・朝鮮半島」としており、本稿もこの呼び方を踏襲する。
- 4) 「オモニ」は韓国語・朝鮮語で「母」を意味する。
- 5) 池田大作の仏教的人間主義については、宮川(2017)を参照されたい。

参考文献

- 池田大作(2012)『池田大作全集 第144巻 小説』聖教新聞社。
———(2012-3)『池田大作全集 第144-9巻 小説』聖教新聞社。
———(2013)『人間革命 全12巻 第2版』聖教新聞社。
「池田大作とその時代」編纂委員会(2022)『「民衆こそ王者」に学ぶ 迫害と人生』潮出版社。
佐藤優(2019)『21世紀の宗教改革——小説「人間革命」を読む』潮出版社。
———(2020)『池田大作研究——世界宗教への道を追う』朝日新聞出版。
———(2022a)『プーチンの野望』潮出版社。

- (2022b) 「池田思想の源流『若き日の読書』を読む 第7回『隊長ブーリバ』とウクライナ紛争」『潮』6：176-83。
- (2022c) 「希望の源泉 池田思想を読み解く 第71回『人間のための宗教』を高らかに宣言」『第三文明』6：52-7。
- (2022d) 「希望の源泉 池田思想を読み解く 第73回 創価学会の『日蓮本仏論』に見る民衆救済の視点」『第三文明』8：52-7。
- 聖教新聞社 (2023) 「人間革命検索サービス」、https://www.seikyoonline.com/search_novel/、2023年3月16日閲覧。
- 創価学会 (2023) 「小説『新・人間革命』に学ぶ」、https://www.sokanet.jp/recommend/human_revolution/、2023年3月16日閲覧。
- 宮川真一 (2007) 「池田大作先生の『9・11』認識と『人間主義』平和構想」創価大学通信教育部学会編『創業者池田大作先生の思想と哲学 第1巻』、第三文明社、167-93。
- (2017) 「現代世界における文明論的パラダイム・シフト——『仏教的人間主義』の可能性」『通信教育部論集』20：69-84。